知ってはいても・・・
準備室での夕刊と大学院での仏像調査

齊藤泰嘉
芸術学系助教授

「こらっ！それが上司に物を渡す時の態度か！」

いきなりの雷にドッキリ，ビックリ。1977年4月。春とは名のみの北海道は札幌でのこと。

北海道立近代美術館建設準備室の看板のかかるプレハブ庁舎に叱声が響く。

時間が止まり，職場に沈黙が・・・。

叱ったのは，倉田公裕準備室長（のちに館長，さらにのちに明治大学教授），叱られたのは，就職したのが嬉しくて舞い上がっていた新米学芸員の私。

準備室の郵便受けから夕刊を取って来るようにと室長から命じられた私は，おやすい御用とばかりに配達されたばかりの道新（北海道新聞）夕刊をヒョイと室長に手渡したのだった。

この時である。初めに書いた「こらっ！それが・・・」という一喝を頂戴してしまったのは。

「片手で上司に物を渡す奴がいるか」と叱られた私は，あわてて両手を添えて夕刊を渡し直した。これで安心と思いきや再度のお叱りが・・・。

「折ったままではなく，ちゃんと読めるようにして渡しなさい」

部下を叱る上司を信頼せよという社会人1年生向けの心構えをある人から聞いていた私は，この言葉を思い浮かべ，倉田室長に反発しないですんだ。

このときの体験は，今も忘れられないものだが，倉田室長が，学芸員という美術館（あるいは博物館）の専門職員にとって大切なあることをこのとき教えようとしていたのではないかと気づいたのは，学芸員生活もしばらく経ってからのことだった。

美術館も含めて博物館の業務は，資料の調査・研究，収集・保存，展示・教育が，3本柱である。

学芸員は，このすべてについて，専門的立場から関わってゆかねばならない。

博物館学の教科書風に言えば，こうなるのだが，例えば，いの一番である「資料の調査」一つをとってみても，そう簡単なことではない。

まずは，調べようと思う資料の所蔵者に電話をしたり，手紙を出したりしなければならないが，その時の言葉づかいひとつで，調査・研究の扉が開かれたり，閉まったりしてしまう。

博物館学では，「資料」とクールに呼ぶ絵画や彫刻などは，それを大切に所蔵している人にとっては「お宝」である。画家であった亡夫の残した絵の数々は，妻にとっては「資料」などではなく二人で歩んだ人生の「思い出」なのだ。

そうした「お宝」に対しては「調査」というよりも，謙虚に「拝見する」という気持ちが大切である。

そして，その謙虚な気持ちがあれば，「お宝」の取扱いも慎重で丁寧なものとなり，所蔵者からの信頼も得られる。そうなれば，「お宝」であっても，美術館の展覧会に貸し出してもらえることにもなる。

ところが，その「お宝」を調査するときに片手でヒョイとお返ししたりなどしたらどうなるだろうか。所蔵者の信頼を損ね，お出入り禁止などということにもなりかねない。

札幌の建設準備室で倉田室長が，学校を出たばかりの私になぜ，「両手で！」と叱ったのか。学芸員にとっては，作品の丁寧な取り扱いがもっとも大事なことだという教えが込められていたのだと思うのである。あの夕刊は，ただの夕刊ではなかったのだ。今，思えば・・・。

倉田室長から見れば，「この男は，大学院まで行ったというのに，どういう教育を受けてきたのだろうか」ということになるだろう。

私自身としては，そう言われても仕方のないことではあったのだが，母校の名誉のためにここで恩師の一人に御登場願うことにする。

それは，西川新次先生という日本彫刻史の研究者で，今はもうお亡くなりになっている。

この西川先生のお供で，千葉県内のあるお寺に仏像の調査に連れていっていただいたことがある。私がまだ大学院の学生の頃のことである。

西洋美術史を専攻していた私にとっては，ふだんは学ぶことのできない貴重な体験であった。

西川先生は，そのお寺の住職との挨拶がすむと，運ばれてきた仏像の前で合掌し，穏やかな声で「拝見します」とおっしゃられてから，仏像を両手で支え，

じっくりと観察を始められたのだった。そのときの西川先生の謙虚で丁寧な態度は印象深いものだった。

それは，ごく自然な動作であり，学生に何かを教えようとする教育的配慮からの所作には，見えなかった。

だが，それは，美術の研究をこれからしてゆこうとする後輩への意図せぬ教えになっていたのだ。今，思えば・・・。

美術作品への謙虚で丁寧な接し方のお手本を大学院で見せていただいていたにもかかわらず，身についていなかったのだ。「知ると成るとは無限の差なり」という言葉があるが，まさにそのとおりである。

夕刊といえども夕刊にあらず・・・。いつか新聞で読んだことがあるが，ある大学の先生が仏像の調査にお寺に行き，住職が現れる前に勝手に本堂の電気をつけ，御本尊の裏に回り，許しのないまま調査をしていたことがあり，問題となったという事件があった。

いくら学者としての知識や教養があっても・・・ということの見本のような話だが，私も同類だと思うと笑えない。

大学院時代に受けた西川先生の無言の教えをすぐには，生かすことができなかったが，倉田室長に「上司に片手で！」と新米の頃に叱られたおかげで，その後の約20年間の美術館勤務を大過無く過ごすことができた。

北海道立近代美術館に3年間勤務した後，東京都美術館に移った私は，1985年にニューヨークに行き，日本の現代美術作品の調査をする機会を得た。

ニューヨーク近代美術館やチェースマンハッタン銀行の収蔵庫，さらにロックフェラー家を訪問し，アメリカ人の収集した戦後日本の前衛美術の名品を見ることができた。ロックフェラー家では，散歩から帰って来られたロックフェラー3世未亡人から突然，われわれの見ていた油絵を東京都美術館に寄贈しましょうとの申し出があり，同行の誰もがアッと驚くハプニングまであった。

「謙虚」であるべき作品調査にもかかわらず，そのときの私は，その白髪一雄の絵を前にしてよだれを垂らさんがばかりに欲しそうな顔をしていたのかも知れない。

大学教育が，社会性のある人間育成を目指すことは，当然だが，失敗してこそ身に着く心構えもある。学生に示すべきは無言の教えであり，出会いの不思議さが未来を開くという夢でなないか。

（さいとうやすよし　博物館学）